

令和4年度

## 一般入学試験

国語

時間：50分

満点：100点

### 受験についての注意

- 1 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないでください。
- 2 問題用紙は11ページ、問題は一～三まであります。
- 3 開始の合図があったら、まず解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号を記入例にしたがってマークしてください。
- 4 試験中、問題用紙の印刷が見えにくい、または文章等で不明な点がある場合は、手をあげて監督者に知らせてください。ただし、問題に関する質問には、いっさいお答えできません。
- 5 各問題とも、解答は解答用紙（別紙）の所定欄に記入してください。
- 6 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、監督者の指示にしたがってください。
- 7 解答用紙だけ回収します。問題用紙は持ち帰ってください。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

われわれ日本人の「うち」は家であり、家の外の世間は「そと」であるということ。これを建築の空間領域的に見直すと、靴をぬいでくつろいでいる空間は「うち」であり、靴をはいている空間は「そと」であるということができよう。

そこで、一つの卑近な例をあげてみよう。いわゆる西洋式ホテルと、温泉観光ホテルのように旅館から出発したホテルとの違いは、一体どこにあるのであろうかということを検討してみたい。両者とも外観を見れば堂々たる鉄筋コンクリート造の近代建築であるが、内部に繰り広げられる空間の秩序はまったく異なっているのである。それは「内部」と「外部」との境界の置きかたによるのである。旅館から出発したホテルは、まず第一に玄関で靴を脱ぐ。通常、われわれ日本人にとっては靴をぬいだ所から「内部空間」にはいると考えられるから、玄関ロビーも廊下もエレベーターもすべて「内部」であり、ゆかたに丹前で自由に闊歩できる空間であり、むしろ背広にネクタイの正装でいる方が場違いであるような感じすらするのである。そして通常、旅館式ホテルの玄関は夜は鍵を締めるかわりに個室には鍵をかけない。入浴のような個人的で私的な行動も海や山の見えるケイシヨウの大浴室で多数の人が一緒にいる。日本人にとって、旅館は「家」の拡大された「内部」の空間であり、ここに偶然泊り合わせた人々は家族の一員であるようにふるまうのが喜ばれるのである。

それに対して、いわゆる西洋式のホテルではどうかであろうか。通常、ホテルの玄関は二十四時間開放されていて、靴をはいたまま自由にロビーや廊下を歩くことができる。これらの空間は日本式のホテルの空間とは異なっていて、街路のような外的秩序の延長であり、A、公的な空間でもある。であるから、これらの場所でもたまたま泊り合わせた人々と馴れ馴れしくしたり、ゆかた、パジャマ、ステテコだけで闊歩することとは、ここを「外部」と考えている人々にとってはいかにも不都合である。西洋風のホテルでは個室はきちんとした壁や頑丈な扉によって区別され、その扉には精巧な鍵が取り付けられている。この個室ではじめて「内部」に入ったと考えられるから、靴をぬぐことも、ゆかた、ステテコ姿になることもまったく自由である。その代り、個室を出るときは、わが国で家の玄関を靴をはいて出ると同じ意味をもつ。靴をはいて個室を出れば、家庭内の食堂であろうとホテルの食堂であろうと街のレストランであろうと同じく「外部」である。② 西欧の伝統としての「内部」「外部」の意識にはこのような考えがあると思われる。

さて、靴をはいたまま暮らす西欧的雰囲気とは、独立した個の対立による外的秩序の空間であり、靴をぬいで暮らす日本的雰囲気とは、わけへだてのない個の集合による内的秩序の空間であるということができよう。ここで外的秩序は内的秩序に必ずしも優っているとも考えられない。内的秩序には外的秩序にない親密感や安心感があり、住む人々に仲間意識やくつろぎを与えてくれる。しかしながら空間領域には意識の上で内外の別があり、どこにこの境界線をおくのかということ強く意識する必要があると考えられるのである。たとえば、列車の寝台車やホテルの廊下を外的秩序と想っている人々と、同じ場所を内的秩序と想っている人々とは同席すると、服装、C、タイド、話し方等が不調和で、

お互いに不愉快な思いをすることがあるからである。

わが国では伝統的に、家の内部に整然たる秩序をととのえ、家族を中心に一軒ごとに内的秩序を保ってきた。内部に秩序をもつということとは、別な見方をするると建築の外には無関心であることを意味し、都市空間の充実という構想は稀薄であつた。それに対し、西欧諸国では、イタリアの広場などに見られるように建築の外にも美しい模様の舗装が古くから発達し、また家の中で靴のまま入るといふ習慣が生れてきた。この西欧の生活の中には外的秩序の考え方があり、日本の住いの中で行われるようなことが外で行われる。教会で祈り、公園で休み、レストランで食事をし、広場で談笑するということになるのである。

**B**、わが国の大学のキャンパスのありかたが大学紛争以来とみに注目を集めてきたが、ここで、大学の構内は内的秩序の空間であるのか外的秩序の空間であるのか、一体どちらなのかについて考えてみたい。アメリカの大学をおとずれてみると、街の公道が大学の中を突つきり、いつのまにか大学のキャンパスとなり、またいつのまにか街の住宅地になつてしまう場合がよくある。大学も各学部はそれぞれの道路に面するから、何々通り何番と、各建物ごとに住所が異なることがよくある。そのように、大学のキャンパス自体は街の一部であり、構内は外部の空間であり、外的秩序に属している。ただし、構内の秩序は特別な大学警官（ユニヴァーシティ・ポリス）によつて市内と同様な方法で保たれている場合が多い。それに対して、わが国の大学では、正門、裏門のような門があり厳重な扉や柵に取り囲まれて構内の空間を形成している。であるから構内は内部の空間であり、内的秩序に属している。このような内部空間に外部の秩序に属する人々が入ってくることも、あたかも家庭に他人が侵入したかのように教官も学生も感ずることは、大学の構内が意識の上で内部の空間であるからである。大学の門を入る時、実際は靴をぬがないが、空間領域の意識の上では、あたかも正門にある下足で靴をぬいで家の「内部」に入った時のそれである。家の内部には在来は強い家長のリーダーシップがあり、常に平穏と愛情によつてその秩序が保たれてきた。ところが、最近では家長のリーダーシップは薄れ、父と子とのほげしい争いが生じてきた。父親はなんとしても親子の愛情によつてこれを解決しようとする。教官も学生も靴をはいたまま、靴をぬいで家の中に居るような意識で行動するのである。わが国の大学は建築空間の領域の点から考えると内的秩序の空間であつて日本式旅館の空間であり、西欧式ホテルのような外的秩序の空間ではないと言えるのである。

さて、西欧のホテルや住いの廊下やロビーは外的秩序の延長であり、靴をはいたまま歩くといったが、それは空間を外的秩序によつて統一する考えかたである。もし、日本的内的秩序によつて空間を統一して考えれば、家の外の道路や公園を室内と同様に素足や足袋はだしで歩くことを意味するのである。もし、われわれ日本人が足袋はだしで外を歩くことを現実的でないと考えらるなら、われわれ日本人と西欧の人々とは空間領域の統一のしかたに違いがあるということを説明しているといえよう。

芦原義信『街並みの美学』より

注1 大学紛争 … 一九六〇年代の学生運動では大学キャンパスに機動隊が突入し、大学の自治について議論となつた。

問一 二重傍線部A～Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みがなをつけなさい。

問二 空欄部 [A]・[B] に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A また B ところで
- イ A つまり B したがって
- ウ A さらに B あるいは
- エ A そのため B さて

問三 傍線部①「『家』の拡大された『内部』の空間」とあるが、これと同じ意味の言葉を本文中から二十二字で抜き出し、その初めと終わりの各五字を答えなさい。

問四 傍線部②「西欧の伝統としての『内部』『外部』の意識にはこのような考えがあると思われる」とあるが、その意味内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 西洋式のホテルでは、玄関やロビーなど、個室以外の「外部」は二十四時間開放されるべきだと考えられている。
- イ 西洋式のホテルでは、日本式のホテルと違って、靴をはいて歩く空間は外的秩序の延長だとみなされている。
- ウ 西欧では、個室だけが日本での「うち」にあたり、そこから出ると全て「外部」にあたると認識されている。
- エ 西欧では、靴の問題ではなく、頑丈な扉や精巧な鍵があるかどうかで「内部」と「外部」が区別されている。

問五 傍線部③「空間領域には意識の上で内外の別があり、どこにこの境界線をおくのかということ強く意識する必要があると考えられる」とあるが、その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「内部」と「外部」の境界を決めておかないと、その場にいる人々に不必要な仲間意識をもたせる恐れがあるから。
- イ 一つの空間に対する内外の境界が統一されていないと、外的秩序のほうが優っていると誤解する人が出てくるから。
- ウ 空間領域の内外の区別が人によって異なると、「内部」「外部」ともに整然たる秩序を保つことが難しくなるから。
- エ 同じ空間を「内部」ととらえる人と「外部」ととらえる人が混在すると、互いに嫌な思いを抱くことがあるから。

問六 傍線部④「わが国の大学は建築空間の領域の点から考えると内的秩序の空間であって日本式旅館の空間であり、西欧式ホテルのような外的秩序の空間ではないと言えるのである」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。次の文の空欄を埋める形で六十字以内で答えなさい（句読点を含む）。

教官も学生も靴をはいてはいるが、から。

問七 本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本と西欧とでは空間領域における境界の置きかたに違いがあるが、「内部」と「外部」それぞれの整然たる秩序を保つために境界の置きかたを両者で統一すべきだという動きがみられる。

イ かつての日本では家族を中心とした内的秩序ばかりが重視されていたが、最近では家長のリーダーシップが薄れ、西欧の生活にみられるような外的秩序に目を向ける人が増えてきた。

ウ 西欧では建築外部の美しさを重視する外的秩序の考え方が強いいため、家の内部の秩序への意識が稀薄で、内的秩序が与えてくれる親密感や安心感を求めようとする人が多い。

エ 日本では昔から家の内部での秩序が大事にされてきたのに対し、西欧では生活の中に外的秩序の考え方が根づいており、住いの廊下も公園も同じ秩序を保った空間だととらえられてきた。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(これまでのあらすじ) 陸上部に所属しているダイ(齋藤)は、骨折をしてしまい、部活動を休んでいた。しだいに学校も休みがちになり、なにもかもやる気がなくなっていた。ある日、友人のキーマの家をケンケンと一緒に訪れたダイは、キーマたちから市で行われるフェスの実行委員になるよう誘われている。

テーブルに置かれたのは、イチゴのパックだった。ぺろりとめくれたラップに『規格外品』というシールが貼られている。なんだ、規格外品もふつうに売られているのか……。

「これ、安かったんだよ」

キーマさんが、二粒がくっついたような形のイチゴをつまんでかじる。

「うん、あまい。ダイも食べな」

おれもひとつつまんで、かじった。あまざっぱさが口中に広がる。

「うまっ」

声に出して言うと、キーマさんが「だろ？」と、ほほえんだ。

なんだ十分うまいじゃん。つーか、規格外品のほうが規格品より食べごたえがあつて、うまいんじゃないか？

おれはイチゴのへたをとって、残った部分を口に入れた。

「さあ、ワイロも受けとったんだから、実行委員やらなきゃな」

いたずらっぽく笑うケンケンに、「詐欺じゃん！」とツツコみを入れて、おれも笑う。もやもやしていたものが、少しずつ晴れていくように感じた。

今のおれを変えたい。変えるきっかけがほしい。

なら、差しだされた手をつかんでみるのも、いいんじゃないか。

この人たちといっしょなら、楽しいことができるんじゃないか……。

おれは、キーマさんとケンケンの顔を見た。

①「や……やります」

「やった！」

キーマさんが喜び、両手を上げて「うえーい」とタッチを要求してくる。

おれは「大げさだな」と苦笑いで、タッチを返した。

フェス実行委員をやるぐらいで、なにかが大きく変わるとは思えない<sup>ア</sup>。けど、なにもやらない<sup>イ</sup>よりは、きっとマシだ。壁にかかった時計を見ると、十二時二十分を<sup>A</sup>過ぎていた。

これから学校に行くか、このままさぼるか。

おれは少し考えて決めた。

<sup>B</sup>昇降口に入ると、給食の放送が鳴っていた。上履<sup>うわば</sup>きにはきかえて廊下<sup>りや</sup>に上がると、「斎藤」と、呼び止められた。<sup>②</sup>陸上部顧問<sup>こもたん</sup>のキノセンが、紺色<sup>こんいろ</sup>のスポーツウェアをカサカサ言わせて足早にやってくる。

「遅刻か？ 病院でも行つてたのか」

体調を気にしてるのか、おれの顔をじっと見る。

③ 体育の授業で顔を合わせてはいるが、一対一で会うと、幽霊部員<sup>ゆうれい</sup>としてはちょっと気まずい。

おれは、じりつと、後ずさ<sup>ウ</sup>った。

「いや、ちょっと学校に行きたくないなって思つて……」

「ああ、それはおれも毎日、思うけどな」

キノセンが厚い胸板を張って、ははっと笑う。

「それ、先生が言っちゃダメだろ」

おれがツッコむと、キノセンはへへつと、ところどころ白髪<sup>しろが</sup>のある頭をなでてから、ふつと、小さく息をついた。

「斎藤はストイックだからなあ。そこがいいところでもあるんだが、自分を追いつめすぎるなよ。きつくなったら、小出しにしろ。おれでもいいし、スクールカウンセラーの先生や保健の先生もいるしな」

ストイック？

なんか、勝手に決めつけられたようで、イラッとする。

「おれ、そんなふうに見えますか？」

ぐいつと前に出ると、キノセンは目を細めてうなずいた。

「ああ。斎藤は陸上部の練習、手を抜かないでやっただろ。本気で記録を伸ばしたいっていう思いが伝わってきて、感心してたんだ。それで、リレーや走り高跳びをすすめた。ただ、自分にきびしい分、あせるだろ？」

どきつとした。

とがった気持ちがあつたと力をなくし、代わり<sup>④</sup>に熱いものがわきあがつてくる。

キノセンは、おれのことを見ていてくれてたんだ。リレーの選手に抜擢<sup>はぶってき</sup>してくれたり、走り高跳びをすすめてくれたりしたのも、おれを認め<sup>め</sup>てくれたからなんだ。

これまで投げつけられた大人の言葉は、決めつけばかりで受けとりたくなかった。けど、キノセンの言葉はきちんと受けとめたいと思った。たしかにおれは、なりたいたい自分になれなくてあせつた。よゆうがないから、イタ<sup>c</sup>いとところをつかれると、よけいにハラ<sup>D</sup>が立って、ムキになった。

サーッと、目の前のもやが晴れていくような気がした。

「そうかもしれない……」

おれがつぶやくと、キノセンはうん、とうなずいた。

⑤  のも大事だが、これ以上進めないって時は、ちがう道を探すのもひとつの手だ。それは逃げじゃない。新たな道の探求だ」

「先生も、先生らしいことを言う時があるんすね」

ちやかして言う時、キノセンは「言われちゃったな」と、頭をかいた。

「まあ教師というより、少し長く生きている先輩としてかな。おれだって初めから体育教師を目指してたわけじゃない。高校まで体操部で、夢はオリンピック出場だった。ま、それはおれの例だから、斎藤は斎藤が納得できる道を見つけれよ」

そうだよな、キノセンにも先生になる前があつたんだよな、と当たり前前のことに、今さら気づいた。

「先生にも、中学生だった時があつたんすね」

「そりゃ、あるだろ。思いたしたくないような、恥ずかしいこといっぱいあるよ」

「恥ずかしいことー！」

おれが笑うと、キノセンはちよつとムキになった。

「おまえな、今は笑ってるけど、十代なんて大人になって思いたしたら、恥ずかしいことだらけだからなっ」と言って、目を細める。

「でも、十代だから、できることばかりだったよ」

おれは笑いつづけた。笑いすぎて、目尻に涙がうかんだ。

陸上部に入ってよかった。キノセンが顧問でよかった……。

⑥「先生、おれ、あとで退部届け、出しに行きます」

「おう」

うなずくキノセンに会釈して、おれは階段に向かった。

ささきあり『サード・プレイス』より

問一 二重傍線部A～Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みがなをつけなさい。

問二 波線部ア～エのうち、品詞の違うものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 傍線部①「や……やります」とあるが、ダイはどんな気持ちから実行委員をやるか返事をしたのか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 知識も自信も持ち合わせていないが、今の自分には実行委員をやる道しか残されていないと観念する気持ち。

イ この仲間と実行委員に取り組むことが、今の自分を変えることにつながるかもしれないと期待する気持ち。

ウ 実行委員という経験が、やる気をなくした自分に大きな名声をもたらしてくれるはずだと確信する気持ち。

エ 自分のことを心配して、新しいことに挑戦するよう奮い立たせてくれる仲間たちの存在に感謝する気持ち。

問四 傍線部②「陸上部顧問のキノセンが、紺色のスポーツウェアをカサカサ言わせて足早にやってくる」とあるが、このあとに続くキノセンとダイの会話場面において、会話の雰囲気や冗談めかしたものからより真剣なものへと変わるきっかけとなるキノセンの動作が表現された部分を、本文中から十二字で抜き出しなさい（句読点を含む）。

問五 傍線部③「おれは、じりっと、後ずさった」とあるが、このときダイが「後ずさった」理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 顔を合わせたくないといつも思っているキノセンに見つかってしまい怖じ気づいたから。  
イ 実行委員をやると決めた自分の心の内を見透かされるようで気恥ずかしかったから。  
ウ 体調が悪くて学校に遅刻したと嘘をついたことを非難されるだろうとひるんだから。  
エ 今の自分のやる気のなさをキノセンに指摘されるのではないかと身構えたから。

問六 傍線部④「代わりに熱いものがわきあがってくる」とあるが、このときダイはどんなことに気づいて胸が熱くなったのか。「本気」という語を用いて、「こと。」に続くように、五十五字以内で答えなさい（句読点を含む）。

問七 空欄部  ⑤ に入る語句として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア まっしぐらに走る
- イ 他人を押しつける
- ウ ゆっくりと歩く
- エ 迷わず立ち止まる

問八 傍線部⑥「先生、おれ、あとで退部届け、出しに行きます」とあるが、「退部届け」を出すことを決めるまでのダイの気持ちの変化を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 変化を受け入れられない自分に嫌気が差していたが、キノセンから助言を受けて自分が進むべき道は他にあったと気づき、新たな目標を探そうと気持ち先走っている。
- イ 道半ばで挫折して現実からの逃げ道を探していたが、キノセンに背中を押されたことで再び当初の夢に向かって歩み直そうと強い気持ちを取り戻している。
- ウ 何もかもがうまくいかず意欲を失いかけていたが、キノセン自身の経験談を聞いて自分の努力が十分に足りていなかったことを反省し、心を入れ替えている。
- エ やる気を失いもやがかったような思いですごしていたが、キノセンと話したことで自分の進む方向を決めて踏み出すことができ、清々しい気持ちになっている。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

すべて、蜂は短小の虫なれども、仁智の心ありといへり。

されば、京極太政大臣宗輔公は、蜂をいくらともなく飼ひ給ひて、「なに丸」「か丸」と名を付けて、呼び給ひければ、召しにしたがひて、恪勤者などを勘当し給ひけるには、「なに丸、某刺して来」とのたまひければ、<sup>①</sup>そのままにぞ振舞ひける。

出仕の時は車のうらうへの物見には、はらめきけるを、「とまれ」とのたまひければ、とまりけり。世には蜂飼の大臣とぞ申しける。不思議の徳、

おはしける人なり。漢の蕭芝が雉をしたがへたりけるに、ことならず。

この殿の蜂を飼ひ給ふを、世人、「無益のこと」といひけるほどに、五月のころ、鳥羽殿にて、蜂の巣にはかに落ちて、御前に飛び散りた

りければ、人々、刺されじとて、逃げさわぎけるに、相国、御前にありける枇杷を一房取りて、琴爪にて皮をむきて、さし上げられたりければ、あるかぎり取りつきて、散らざりければ、供人を召して、やをらたびたりければ、院は「かしこくぞ、宗輔が候ひて」と仰せられて、

御感ありけり。  
お褒めになったということだ

注1 京極太政大臣宗輔公 … 藤原宗輔。「相国」も同じ。

注2 恪勤者 … 貴族の家で雑用に従事する侍。

注3 蕭芝 … 前漢の人。数千羽の雉が常につき従っていた。

注4 鳥羽殿 … 院政期に白河、鳥羽両上皇が京都南部に建てた離宮。

注5 琴爪 … 琴を弾くとき、指先にはめる道具。

『十訓抄』より

問一 波線部A「したがひて」、B「召して」の主語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 宗輔公           イ 蜂           ウ 恪勤者           エ 院

問二 傍線部①「そのままにぞ振舞ひける」とあるが、蜂が指示された通りに行動したのは蜂に何があるためか。その「何」に相当する言葉を、本文中から五字以内で抜き出しなさい。

問三 傍線部②「おはしける人なり」を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問四 傍線部③「かしこくぞ、宗輔が候ひて」とあるが、院がこのようなお褒めになった理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 四方に飛び散ってしまった蜂を宗輔公がすばやく寄せ集め、飼い主である供人のもとに一匹残らず戻したから。

イ 突然落ちた蜂の巣から蜂が飛び散り人々は混乱したが、宗輔公が枇杷を使ってその場をうまく収めたから。

ウ 蜂が巣から逃げ出した場合に備えて、あらかじめ宗輔公が蜂をおびき寄せるための枇杷を用意していたから。

エ 枇杷を使って蜂を集めるといふ特技を披露した宗輔公が、蜂を毛嫌いする人々を見返すことに成功したから。

問五 本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 世間の人は、蜂と心を通わせることのできる宗輔公を不気味な力をもった人物だと怪しんだ。

イ 宗輔公が自分を蜂飼の大臣と名乗ったことで、世間の人に宗輔公の蜂好きが広く知れ渡った。

ウ 蜂を操ることに長けていた宗輔公は、世間の人から蜂飼の大臣と愛称を付けられ尊敬されていた。

エ 宗輔公が多数の蜂を飼いならしていることを、世間の人は役に立たないことだと考えていた。